

飛 騰

平成5年5月
第5号



海援隊旗

おかげ様で20万人突破

館長 小椋 克己

一昨年11月、全国から、いや全世界からの募金とご援助を受けてオープンした坂本龍馬記念館は、平成5年3月12日、開館以来483日目以待望の20万人目のお客様をお迎えすることができました。旧婚旅行(?)の途中立ち寄った、東京都中野区にお住まいの黒勝之さんと奥様の正子さんが素敵な笑顔で龍馬の肖像写真を受け取って下さいました。(3ページ参照)

実はこのXデーを、私たちはもう少し先のことと考え、マスコミ各社にもそう伝えてあったのですが、2月中旬から、若い方を中心に来館者が急に増え、嬉しい誤算となったのでした。

NHKテレビ「おーい竜馬・青春編」の人気、不安材料の多い社会の情勢の反映などもあるのでしょうか、平成5年2～3月は20歳代のお客様が7割を超えた感じで、総入館者も3月は前

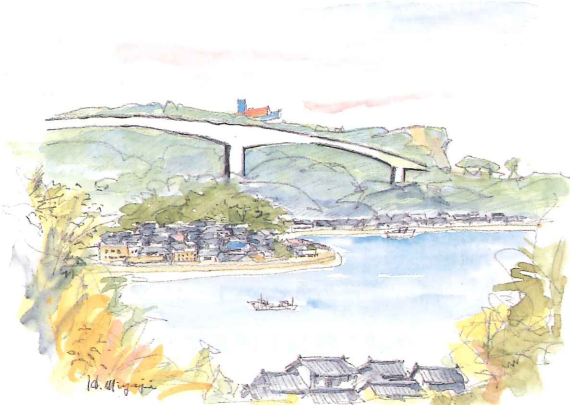
年同期を6%上回り、しかも全国から足を運んで下さっていることに、あらためて感謝申し上げます。

また龍馬で卒論を書くための資料集め、龍馬についてのさまざまなお問い合わせなど、このところ「龍馬への索引」のご利用が増え、身の引き締まる思いをしています。

ところで、龍馬関係の資料を多数持つ博物館でも、普段は展示していないことがあります。一つの考え方ですが、当館の場合は常設ですので、複製とはいえご覧頂ける龍馬資料の数は結構多いのです。また複製技術も進歩し、ニュースは十分汲み取って頂けると思います。

1階の絵ガラス張りの展示室は「海を背景に展示を見、龍馬スピリット理解のヒントを捉えて頂く、龍馬への入り口」と申し上げてきましたが、これも理解が頂けるようになりました。

これからも「龍馬の真価」「記念館の意味するもの」を正しく理解して頂くよう、アピールしていこうと考えています。



本年度の事業計画

1. 特別展の開催

① 坂本龍馬イメージ画展

平成5年度夏休み期間中の特別展として「ぼくの龍馬・わたしの龍馬」——坂本龍馬イメージ画展——を7月25日(日)から38日間、坂本龍馬記念館1階で開催致します。

龍馬が、それぞれの時代や場所で見せたと思われる、種々の表情やイメージ、似顔絵などを描きながら龍馬の豊かな人間性にも触れて頂こう。そして、土佐の生んだ英傑、坂本龍馬の偉業を次の世代に伝えていこうという目的をもって、多くの方々から龍馬のイメージを絵にして送って頂き、展示して皆様に見て頂こうというものです。多くの方々からのご応募をお待ちしております。

1. 応募の仕方

イメージ画は、官製はがきの裏面にお書き下さい。また、龍馬を取り巻く人々を含めて書いてくださっても結構です。

はがきの表面には、〒781-02 高知市浦戸城山830高知県立坂本龍馬記念館「ぼくの龍馬・わたしの龍馬」係宛。

そして〒住所 氏名 年齢 ☎をお忘れなく。

2. 締め切り期日 平成5年6月30日(水)

3. 展示期間 平成5年7月25日(日)

～8月31日(火)

お送りくださった似顔絵やイメージ画の中から、1、ユーモアがあるで賞 2、面白いで賞 3、きれいで賞 4、イメージピッタリで賞 5、そっくりで賞の5賞のうちの1つを選んで、若干名の方に記念品を差し上げます。

註 1、お送りくださる「はがき」は、各自

でご用意下さい。

2、お送りくださった「はがき」は、お返し致しませんのでご了承下さい。

② 「龍馬の銅像物語」展

期間 平成5年11月1日～30日

坂本龍馬の銅像は、高知(桂浜)、京都(東・丸山公園)、長崎(風頭公園)、鹿児島(天保山)の4か所にある。

高知の龍馬像は立ち姿の1人像で、月の名所で有名な桂浜の巖頭に立って、はるか太平洋のかなたを見ている。高知は龍馬が生まれ育った所で、龍馬も何度か桂浜を訪れたことだろう。その顔は温和で思慮深く、懐の深さを表わしている。

京都の龍馬像は2人像で、龍馬は立ち姿、中岡慎太郎は片ひざを立てて坐っている。京都はこの2人にとって、「薩長同盟」「大政奉還」を成功させた地である。2人の表情は厳しく、不退転の決意が表われている。

長崎の龍馬像は立ち姿の1人像で、全身に若さ、青春がみなぎっている。長崎は、その頃、アジアやヨーロッパに門戸を開いた国際都市で龍馬はここに亀山社中(後に海援隊)を設けて商社活動をすすめるとともに、国事に奔走した。これらの銅像のある辺り一帯は観光名所となり、一年を通して訪れる人が多い。

私はまだ鹿児島の龍馬像を見ていないが、写真によると、龍馬は立ち姿で、その傍に妻お龍が坐っているという2人像である。その表情はなごやかで微笑が漂っており、見る人をして思わずほほえまざるを得ないであろう。鹿児島は、龍馬たちの新婚旅行の地であった。

これらの銅像を建てた人は、おそらく龍馬に対する深い敬愛と親しみ、憧憬を抱き、その地

にいたことを誇りに思い、更に龍馬のような人物が輩出することを願ったことであろう。

しかし、いざ銅像を建てるとなると、組織や費用、製作者、建てる場所等で、多大の苦労や困難、喜びがあったはずで、その過程は龍馬再現を願う人々にとって、壮大なドラマといえる。

この「龍馬の銅像物語」展では、その壮大なドラマを追求してみたい。

③ 「坂本龍馬と武市瑞山」展

期間 平成6年3月24日～4月30日

武市瑞山(通称半平太)は文武両道に長じ、眉目秀麗、家族はもとより縁者・知人に対しても細かい心遣いのできる人物であった。また勤王の志厚く、藩主に対して誠忠であった。土佐の青年下級武士の信頼と尊敬を一身に集め、彼等の集団の象徴的存在で、土佐勤王党192名の盟主に推された。

龍馬の坂本家と武市家は遠い親戚の間柄で、2人は幼少の頃から親交があった。

瑞山は一藩勤王の思想を堅持し、かたくなまに山内容堂に誠忠を尽くすが、その思想に飽きたらない吉村虎太郎や龍馬は、文久2年3月相次いで脱藩して、国事に奔走するようになる。

容堂は瑞山の思想や行動を認めず、後の土佐勤王党の獄において、切腹を命ずる。

この特別展では、ともすれば龍馬の陰に隠れがちな瑞山や土佐勤王党を表に出し、龍馬と瑞山の交友や、瑞山をはじめ土佐勤王党員の活躍、悲劇的な最期についても取り上げたい。

2. 図録の作成

当館は開館以来2年目を迎え、所蔵品も増えたので図録を作製する。

図録は、県立歴史民俗資料館や高知市立自由民権記念館のそれを参考にし、本年12月までに

作製する予定である。

構成は、展示室案内図、第1部一常設展示、第2部一龍馬の書簡、掛軸、その他、第3部一自作資料、龍馬の年表とする。

1000部印刷。非売品。

3. 館だより「飛鷹」の発行

昨年度は年3回発行したが、本年度は4回発行で、発行月は5、8、10、2の各月。特別展の紹介、ジャンセン教授の講演記録、拝啓龍馬殿等を主な内容としたい。

1993年(平成5年)3月13日(土曜日)



小椋館長(右)から記念の肖像写真などを贈られる20万人目の小黒さん(県立坂本龍馬記念館)

入館20万人

—483日目に達成—

東京の夫婦に記念品

高知市浦戸の県立坂本龍馬記念館(小椋克己館長)後、案内板に従ってがった。この日の入館者全員にボールペンを贈ったほか、二十日から「海援隊と長崎」と題し、広島県福山市にある「いろは丸」展示館の館蔵品などを五月八日まで展示する。

高知市浦戸の県立坂本龍馬記念館(小椋克己館長)の入館者が十日、二十万人に達した。三月十一日五日の開館以来、四百八十三日目で記録した。二十万人目は東京都練馬区の会社員、小黒勝之さん(五十)と新婚旅行以来、二十五年ぶりの夫婦旅行だそう。妻の正子さん(五十)と泊三日の日程で中国を回った最後の高知で幸運に恵まれた。入り口で小椋館長から龍馬の肖像写真や花束、テレホンカードなどを贈られた。同館は二十万人達成を記念し、前後者にテレホンカード、この日の入館者全員にボールペンを贈ったほか、二十日から「海援隊と長崎」と題し、広島県福山市にある「いろは丸」展示館の館蔵品などを五月八日まで展示する。

桂浜の龍馬記念館

坂本龍馬は阿波国へ寄ったか

学芸専門員 下元正清

3月、徳島県の鎌村善子、辻肇両氏から、坂本龍馬が阿波国へ寄ったのではないかという問い合わせがあった。

鎌村氏は徳島県美馬郡美馬町僧都の方で、鎌村家は昔代々阿波藩家老稲田氏に仕える武士の家柄。幕末の頃、さいと呼ばれる武士が逗留したと伝えられており、このさいと呼ばれる武士が、坂本龍馬ではないかというのである。

現在のところ、それを証明する資料は残念ながら見当たらない。

一方の辻氏の話は、大略次の通りである。

昔、我が家の前に旧浅川村長池内亀太郎氏の家があったが、この家は昭和21年の南海大地震の折り、津波に押し流されて、今は後かたもない。

自分は若い頃左官をしていたので、この池内家に始終出入りしていた。16、7歳の頃、亀太郎より次のような話を聞いた。

龍馬が船で上京中時化に遭い、船は浅川の港に避難し、その夜龍馬は池内家に泊った。龍馬は堂々たる体格で切れ長目、人を射すくめるような偉丈夫であった。その時、亀太郎は龍馬から「わしと一緒に行かんかよ」と誘われた。

亀太郎は国士肌の人で、村民の信望が厚く、うそを言うような人ではなかった。

(徳島県海部郡海南町浅川 辻肇)

現存する龍馬の書簡や龍馬に関係した人々の書簡や日記等には、龍馬が上京中浅川へ寄った

という記録はない。しかし調査の手掛りは若干あるので、調べてみた。

1、船に便乗して江戸(又は大阪)へ行ったとすれば、いつのことか。

前記の亀太郎氏の話によれば、龍馬に同行者はいなかったようだから、安政3年8月20日、剣術修行のため再度江戸へ行った時と思われる。

2、安政3年8月20日の天候

高知地方気象台百年誌「高知県の気象」には、安政2年8月20日風雨と記されている。

同気象台防災業務課長出羽春昌氏のご教示によれば、「安政2年8月20日風雨」のことは徳島、和歌山、石川の各県の災害史にもあるので、各地にかなりの被害が出たのであろう。しかし、同3年8月20日については、本県はもとより徳島、和歌山両県の災害史に記録はない。

記録にないが丁度台風シーズンであるから、多少の風雨波浪はあったかもしれない。

3、大廻り船の中城家と坂本家との関係

当時、中城家は種崎浦の回漕問屋で、藩の大廻り船(高知・江戸直行便の藩船)の船長も務めていた。坂本家とは深い親交があったので、父八平の依頼により龍馬を便乗させることはできたと思われる。

4、坂崎紫爛の「汗血千里駒」では、龍馬が二度目の江戸遊学から帰国する時、大阪から乗船し(小廻り船)、浦戸(高知)に着いたと描かれている。

以上のように見てくると、龍馬が浅川へ寄ったという資料はないが、その可能性はあるわけで、それにつけても池内家が津波で壊滅したことが残念である。今後、他の旧家からこの件に関する資料が発掘されることを期待する。

〔講演記録〕

坂本龍馬と二十世紀 (4)

プリンストン大学教授 マリウス・B・ジャンセン
訳・町田宗鳳 於 '91・11・14 高知

戦後日本にも現代版坂本龍馬が、特に若い人々の間に出現しました。京都東山霊山歴史博物館に、若者からの坂本龍馬宛の悩みごと相談の手紙が来るたびに、その返答を書いていた人物がいたのです。新聞記事によりますと、中には博物館に電話をかけてきて、龍馬本人と話しをしたいという人さえあったそうです。「読売新聞」の記者は、「映画、テレビ、小説などを通じて坂本龍馬を知った世代が成長し、彼のことを現代人と受けとめているらしい」と書いています。このブームについて数年前の「土佐史談」に広谷氏が紹介しているように、龍馬を現代の英雄として崇める一種の崇拝者グループがあるようです。マスメディアが人々の意識を左右するようになった現代社会では、有名になるために教科書に登場する必要はありません。戦前の子供達ほどには、現代の子供達は、教科書から物事を吸収しないようです。

したがって、教科書問題に対する警鐘は、私はやや行き過ぎではないかという気がいたしております。しかし、昔ほど教科書が有害であり得るかどうかということについては、多少疑問もっています。もちろん、教科書が若者の思想形成や思考力、それに発言力を伸ばすべく利用されていないなら、それは不幸なことでせう。せつかくの機会を逃していることとなります。

ご存じのように、米国でも教科書問題は、常に論争的となっています。アメリカの問題は、国家主義のために利用されるか否かではなく、米国の歴史上、マイノリティーのグループが公

正に扱われているかということでもあります。史跡の発掘を重ねていくうちに、初期アメリカ史、西洋の影響を受ける以前の文化が、敬意をもって見られるようになり、ウィリアムズバーグなどの特別なコミュニティが我々の過去を再現してくれるようになりました。同じように日本でも、明治村などができ、やはり過去を再現しようとしているように思われます。その意味で、高知に現存する最後の武家屋敷、大川筋保存のためのキャンペーンが成功することを私は祈っております。あのような建造物は、過去を生き生きとしたものにするからです。

だからこそ桂浜を望むこの素晴らしい記念館の完成は、歴史家のみならず日本人のすべてにとって喜ばしいことだ、と私には思われます。今日ここにその開館を祝うこの建物と同様、過去を現在と未来に投影してくれることでしょう。高橋晶子さんとそのお仲間の方々が、未来への展望を育むべく、この素晴らしい建物を提供して下さいました。未来と過去は互いにその一方がもう一方を作り上げていくものです。ところで二十世紀末に生きる我々にとって、龍馬はいったいいかなる意味をもつのでしょうか。

まず第一に彼の生き方は、開放された社会というものが、非常に大切なものだということを示唆しています。彼と彼の世代の人々は、牢固たる身分制と戦いながら、自らの低い地位にも関わらず、重要な仕事を成し遂げました。すべての人々にチャンスと均等に与えない社会制ほど無駄なものはありません。龍馬の時代から、日本は有能な青年にチャンスを与えて久しいです。次に残された課題は、若い女性にも等しくチャンスを与えることでしょう。

(以下、次号に続く)

特別コーナー

「海援隊と長崎」展

坂本龍馬にとって長崎は、第2の故郷ともいえる所で、龍馬はここに「亀山社中」(後に「海援隊」に改編)を置き、水夫・火夫を含めた約50名の同志を率いて、商社活動を進めるとともに国事に奔走した。

長州藩のユニオン号購入問題・薩長同盟・ワイルウェフ号遭難事件・いろは丸沈没事件・船中八策・イカルス号水夫殺害事件・大政奉還建白運動等は、すべてこの時期での出来事である。

龍馬を語る時、長崎を抜きにして語ることはできないので、いつか「海援隊」をテーマに特別展を企画したいと思っていたところ、それが意外に早く来た。

1月8日から3日間、私が長崎へ出張したことや、1月に来館者が減少したことがきっかけとなり、急拠この特別展開催が決定された。

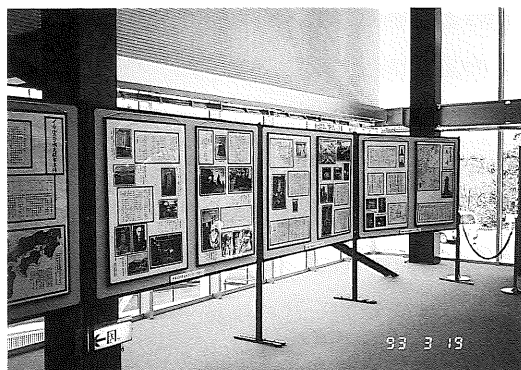
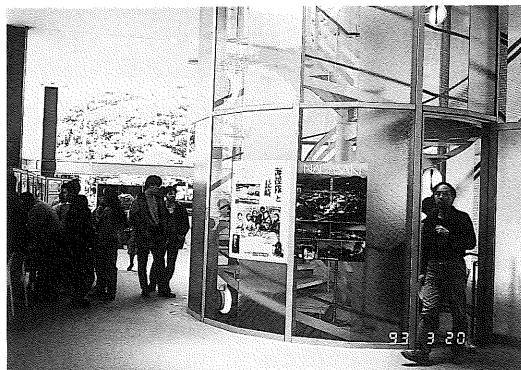
期間を3月20日から5月8日までの50日間とし、直ちに準備に入り、不足の資料は次の諸機関や人々のご協力をいただいた。ここにその名を記し、あらためてお礼を申し上げたい。

- いろは丸展示館 (広島県福山市 靱)
- 長崎市教育委員会文化財課 宮下雅史氏
- 長崎市グラバー園
- 長崎県有川町教育委員会 山下利平次氏
- 高知市教育委員会社会教育課
- 長崎市 小曾根吉郎氏
- " 織田 毅氏
- 高知市 弘松 潔氏

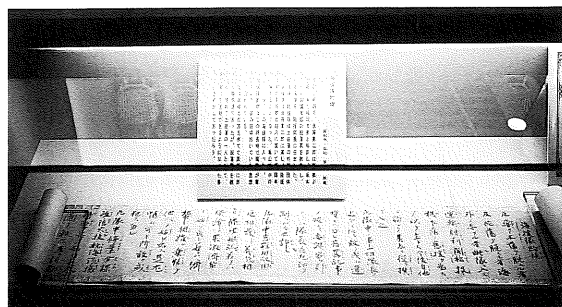
幸いにして連日大勢のお客様をお迎えしており、展示内容についてもご好評をいただいているので、関係者としてたいへん喜んでいる次第である。

以下、内容についてご紹介したい。

- 1、展示目録及びポスターは、当館職員の自作。
- 2、1階展示室 (自作パネル16枚)



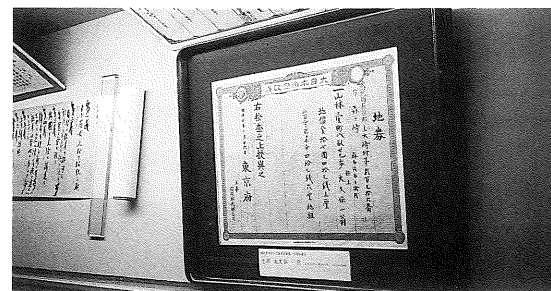
3、地下2階展示室



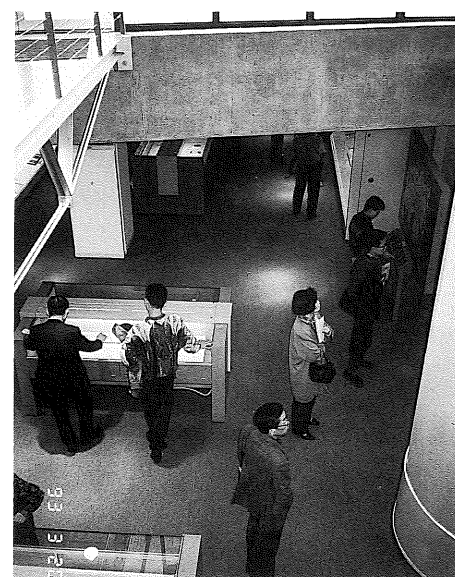
▲海援隊約規 (龍馬の真筆)



▲いろは丸からの引き揚げ物



▲大久保一翁の地券



この特別展の内容は、長崎に本拠を置いた龍馬や隊士の活動の、アウトラインを示したに過ぎず、彼らの心情追求には程遠い。

しかしお客様がこの特別展で刺激され、次に長崎やいろは丸展示館を訪れた時、今迄とは一味違った感覚で見学できるのではないかと期待している。

学芸専門員 下元 正清

表紙絵について

原画は水彩画で、作者は、しろうと日曜画家の集まり「チャーチル会・高知」のメンバー・元高知市助役の宮地英彦さん。

宮地さんは、現役時代からスケッチの趣味を持ち、職場の美術展にも出品し、巧みなデッサンと清々しい淡彩に定評があった。海辺の風景の作品も多かったので、今回特にお願いで絵はがき用に描いて頂いた5点のうちの2点。

水彩絵具の発色がよいフランス製アルシユのスケッチブックを持って、龍馬記念館の周囲は勿論、この館を遠望する浦戸湾周辺のあちこちに足を運び筆を走らせるうち、記念館の朱色のスロープや、大胆な直線の組み合わせなどが、緑の自然の中にスムーズに納まっており、実に良い場所にあると気づいたようだ。

「何となく不思議な感じで見ているうち、建物とその景色に引き込まれて、絵筆が独りでに走るようでした。ホレて描くと描きやすいですね。力まず、楽しみながら、いつのまにか仕上がっておいりました」と言う宮地さん。

みなさんも、絵筆を持ってお出かけになりませんか。 (館長 小椋 克己)

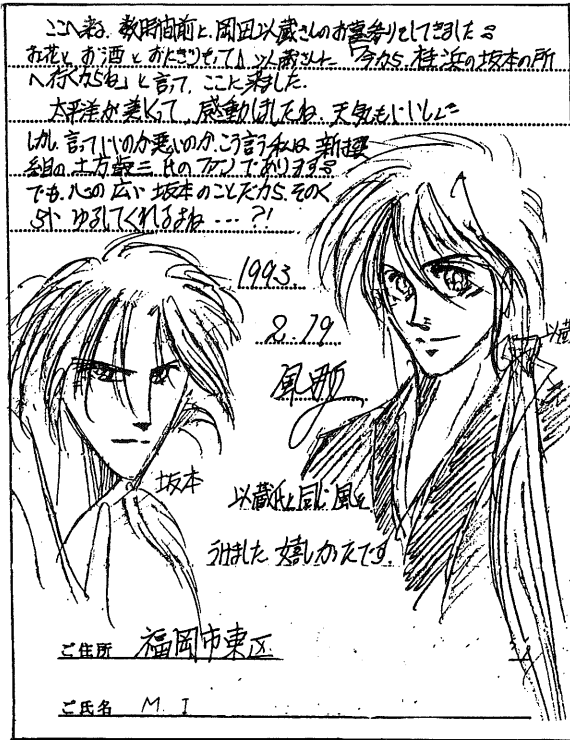
入館状況

平成5・4・13現在 (開館以来516日)

○総入館者数	220,448人
○最多入館 平成4・1・3	2,552人
○最少入館 " 5・1・11	49人
○本年度最多入館	平成5・4・4 1,379人
○本年度最少入館	平成5・1・11 49人
○本年度1日平均入館者数	556人



拜啓 龍馬殿



- 中学時代、不良として荒れまくっていたとき、学校の先生に「これを読め」と“竜馬がゆく”を読まされた。それ以来、なんとか更生でき、今では大学3年生まできました。龍馬関係の本を何十冊と読み、本日やっと土佐へ来ることができました。自分は山口出身で長州です。もし、あの時代に生きることができれば、自分も……と思います。これからも尊敬させていただきます。

これからの俺の人生は、いつも全力でとばしていきます。

(3月11日 山口県 Y・H 男性)

- ここに来て、今まで知らなかったことが、これほどたくさんあるとは思わなかった。まだまだ勉強不足。もう少し勉強してから

また来ます。

(3月17日 神奈川県 I・M 女性)

- 予定を変えて龍馬記念館へ、あなたの生き方を色々拝見させて頂き、感動しました。

あなたのような男性に、現在お目にかかる事はなく、まことに残念です。一生は短くとも、生きている間せ一杯一日を大切に生きなければ、そう思わずにはいられません。

人の為につくす事、人にやさしく思いやりのある…そんな方だと娘が感じ取った様です。

娘といっしょに旅行して龍馬記念館へ寄った事、幸福に思っております。現在、失業中です。あなたの生き方を学び、精一杯働き、これから娘と二人生きて行こうと思っております。ありがとうございます。

(3月31日 大阪府 O・K 女性)

題字「飛騰」について

文久元年(1861)10月11日、龍馬は剣術修行のため、1か月の国暇を得て、讃岐丸亀の矢野市之丞の道場へ旅立った。この日、樋口真吉は、日記に「坂龍飛騰」と記した。

龍馬は更に国暇延長の許可をもらい、極秘裡に長州へ赴いた。彼は武市半平太の久坂玄瑞宛親書を携えていたのである。

長州萩に着いた龍馬は、久坂玄瑞を訪れて半平太の親書を手渡し、国事について会談する。

今まで一介の武者者に過ぎなかった龍馬が、この旅を機に勤王の志士へと脱皮していくのである。矢野市之丞の所へ行った目的を予め知っていた樋口真吉は、龍馬への期待をこめて「坂龍飛騰」と記したのであろう。翌2年3月、龍馬は脱藩する。(下元書)

館だより “飛騰” 第5号

平成5年(1993)5月1日発行

発行所 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-02 高知市浦戸城山830

Tel (0888) 41-0001